

底本 弘前大岩見文庫
校異 山崎文庫

花供養

【校異】山崎本は題簽遺失

(外題・原題簽)

(表紙見返し)

ひがし山の南無庵に桜木
の肖像あり。これにとし／＼
花をたてまつりて、その実
のおほいならむことをいのる。
そのさくらや、こと木にすぐれ
たれば、野となく、山となく、
浦となくそたちて、めでたき
花のさくといふことをなにはの

米彦がまをす

享和二年壬戌春

(序一ウ)

松風の中にそだちて桜哉

浪こまやかにとゞく芦の芽

陽炎をほうばるやうに鳥鳴て

朔ごとにかえる土器

垣明て日傭を通す家の間

のこる暑さも萩にをさまる

夕月の影さしかゝる高麗靱

むしの音をふむ岡の横道

岱李

蒼虬

竹有

其成

草虫

芦角

和良

甫尺

わや／＼と人の出て来る諏訪の市

火うち袋の雨にぬれけり

そのまゝに住あらしたる竹藪

ことしの夏はひけぬ塩物

神たのむあした夕に川こえて

被白しとだれがとがめむ

露の身を石見之介にいたはられ

夜半の月ゆく観音の山

梟といふもの啼てやゝ寒み

双南

月峰

葦笠

桂郎

銀橋

稻丸

千代道

百池

幽雅

紙漉わぎに年つもるなり

夕風に釜の下火の燃しきり

春まだ早き鮎汲のつれ

花鳥につきへらしたる杖の先

霞がくれにみゆる松原

永祿のころよりあれし宮柱

黒染の身となるも憂恋

時々のおもひに草を引ちぎり

膳もとれぬに水主の又来る

玉洋

梅笛

馬蓼

馬印

湖月

鳥幽

方居

八仙

一笑

工夫して西日をふせぐかけ障子

ほうじやう虫の竹の葉につく

円ほどに水の流るゝ砂のへり

一步見しらぬ国は尊き

右一順

玉藻

楓師

百磨

布雪

花咲て里はしたしき家ばかり

ながき日の心ままりぬ花盛り

花くれて人にかぎりはなかりけり

散もまた酒をすゝむるさくら哉

大阪

大魯

、
祖淳

、
里喬

、
甘男

名月に寝し人も来る桜かな

足のばし寝る夜ぞあたら花の陰

散安き花とて月もかゝりけり

人の見る日を盛なり山ざくら

ちる花を合点でのるか保津川

花の散るのちもちひさき戸口かな

一木／＼暮うつる也花の山

花の山遠寺の鐘のしづか也

、
永六

、
米彦

、
兵庫
和田栖

、
呉来

、
池田
稻丸

、
李杏

、
堺
半柜

三河新城
如竹

花ざかり水は青きにもどる也

遠江原川

可月

夢見草ならず桜の十五日

全

花はよしのさくらはたゞの桜にて

、久喜賀浦

雄之

花の山あつめかねたるこゝろ哉

、

川布

花ざかり起ごゝろよき日和かな

、和吹

曇りなき日はたしか也花に鐘

阿波西分

羽角

ちる桜人には老のなき世也

筑後久留米

双鳥

夕風やさくらのうへに花のちる

、

亀算

散桜松の鱗にかゝりけり
ちる花の夜も日も散て仕廻けり
人なみに雲と見てけり山ざくら
夜ざくらやしづかに散て膝の上
花守や月には芋を売し人
色も香もふくむ桜の木の芽哉
尼寺や匂ひさくらに浮名たつ
けふも亦さくらは捨ず世捨人
山ざくら枝折し人の芳しや

、
筑前博多
嵐儀
、
豊前小倉
榎翠
、
豊后日田
黙雷
、
周防上関
南美
、
、
祝島
芝蘭
、
、
可請
其酸
如学

盛にも折枝はなし初桜

桜咲て海へ入る日となりにけり

夜のさくらゝめば顔にちりにけり

おしかゝる月のさくらや草の庵

ちりかけて夜に入庵の桜かな

鯉も今のぼらばのぼれ瀧の花

白過て心しづまらず山ざくら

初ざくらきのふけふなる日和かな

夕ざくらありたけちると見えにけり

、
時習

、岐波
春郷

、
和道

長門下関
冬蘿

、
羅風

安芸小方
可友

備中笠岡
文里

備後福山
李朝

全

散花に更行月の夜ごろ哉

めでたけれとはいふものゝ桜かな

うつくしき盗人見たり花のくれ

枝先も動かで花のちる日かな

雨の花月夜は人の来ざりけり

日のくれてくれぬは花のあるじ哉

はつぎくら日のまばゆくて覚束な

咲乱す花より出しあらしかな

備前岡山 子坤

讃岐姫浜 一苞

、 桃里

、大野原 湖流

但馬田中 晴鳧

、平野 五柳

、八鹿 素蛤

、網場 吐月

をしむべき花にも雨の降日哉

世をおもふこゝろこそなけれ花の山

春の夜は夢にもみたり桜がり

雨の夜のくはらりと明て山は花

ひた／＼と水にも花のあらし山

手をうてばひゞく桜の木の間哉

あはれさもある春の夕ぐれ

、 十牛

、舟谷 五蒼

、 恕亭

、 丹波大山翠美齋 陶三

、 東亭

、 武陵

、 蒼虬

汐やかぬ浦はしづかに海苔ほして

ぼろ／＼壁のおつる戸の口

縄ほどく櫃の中まで月夜さし

風になるやら雁の出て来る

渋柿は蔦の葉ほどに赤らみて

みな佛ののこる尼たち

草鞋の破れてあがる雨のはね

宇治へ奢のひける四五月

苧ごろになればはしかき門の麦

陵 虬 陵 虬 陵 虬 、 陵

けさのわかれは胸さわぐ也

なつかしき山はかくるゝ跡の浪

血しほぬぐひて御馬まゐらす

明る夜のあたまのうへに鐘冴て

道の阡陌の柳折月

宗旦が若き羽織も花の頃

みそを澄せる細根大こむ

虬 陵 虬 陵 虬

節句より桜に出る入日かな

野村 黛山

| | | | |
|------------------|---|----|-----|
| けふも花に日のくれて行麓哉 | 、 | 成松 | 双鳧 |
| 深山路は我とさくらのふたりかな | 、 | | 桂之 |
| 三日めの花はまことのさかり哉 | 、 | | 帰由 |
| 吹風のすこしはうれし花ざかり | 、 | | 六里 |
| 觜太の声うつゝなや花の中 | 、 | | 峰琴 |
| こゝろまでうつくしうなる桜かな | 、 | | 献之 |
| ながき日を花ありたけにくらしけり | 、 | | 奈良布 |
| 奥山に酒売家や初ざくら | 、 | | 淇水 |
| 守る身にはしづけき花の夕哉 | 、 | 梶原 | 洞々 |

ほむのりと桜に乗て出る日かな

春も露おく山陰の家

水車雪どけごろは休ませて

箒をつくる羽根すぐりけり

酒すこし飲て冷つく月の前

年貢ほど取背戸の萱原

柴栗のはじけかゝりて小淋しき

村雨のして矢は狂ふなり

、国領

寛枝

蒼虬

、

枝

、

虬

枝

虬

執行者のくふ物たばふ紀の山路

扇にとむる夜すがらの歌

下々の恋もうらやむ恋をして

水の面を鳥は鳴行

軒低うすめば芒に秋の来る

我子にも似て青そぼの月

あれ／＼し野分の跡の朝の露

雲のかゝらぬ富士をけふ見る

花の陰軍に負し咄せむ

、 虬 枝 虬 枝 虬 枝 虬 枝

鯛にことぶく台の若松

枝

はつ花につる／＼のぼる朝日哉

伊賀上野

右文

錆ぬぐふ刀にちりぬ夕ざくら

、

五巢

鳥もまだかくれかねたり初桜

、

桂枝

灯うつりに又闇もよきさくら哉

、

鷺満

夜のあらしされども花の開くあり

、

尹之

朝の花蜂の動かす処々

、

单鶴

ちる花に馬の鬣ふるひけり

、

和秀

春毎や松の思はむ花常盤

ことに此御室は花の女かな

月の声桜の酒のあまり哉

願ひ満る通夜のもどりや初ざくら

ちる桜扇ぬらして帰りけり

花廿日よしのゝやみは破れたり

花ちりて大仏殿も野原哉

初花やけさ見付たる藪の中

いひつくしいひつくされぬ桜かな

、
蛙方

、名張
蟠松

、
倉経

伊勢津
理玉

、山田
四溪

、四日市
眠五

、大塚
烏翠

、前田
居平

、
朴所

花鳥の中をあへなき嵐かな
うちにもても嬉しき花の日和哉
此ごろや花とあらしの中に住
しみ／＼と花に定る月夜哉
守となく花にこゝろのおかれけり
曙はさくらがもとの小家かな
花守の夜は寝やすきと申けり
花にせく人のすがたや小砂原
共ならぬこゝろのさきや花に風

近江舟木 楚雀
、 圃丈
、 太田 知石
、 和夕
、 梅之
、 麦種
、 二鶴
、 途中 一溪
、 鶴子

名木の桜寄りけり東山

旅すればふた月ごしに桜哉

月夜にもあはではやちる桜かな

かくばかり散花はあらし嵐山

きさらぎや花のうへちる日和雲

打あげ砂にひかる小鯛

蝶鳥に今狩衣を脱捨て

ひくい家並の風も通らぬ

、佐川

未子

、八幡

芳之

、

柏翠

、大津

宇洋

越前丸岡

文蘿

、

甫立

、

里晴

、

度柳

丁々と木を伐る月の川向ひ

ふとき竹から秋の寂しき

菓子瓜のころ／＼転る根来盆

三夜さばかりをおなじ夢見て

(ママ)

将基 さす人は大和へ帰りけり

不自由がちに曇る冬空

白壁の社とりまく群雀

一里廻つて国のこと聞

大かたがさび鮎おほき翌市

、
丹柱

、
素更

、
一透

、
古蓼

、
糍青

、
竜至

、
呉川

、
友甫

寝てから月のぴか／＼とする

洗ひ髪身に知る恋の肌寒み

未だ／＼物の朧なりけり

水清し駒牽寄む花のもと

するどき岩の苔に糸遊

思はずに居ても桜の日次哉

花見えてそれより奥の薄煙

市人のいとまはをしきさくら哉

丹柱

糶青

度柳

石川の水に音なし遅桜

半日はおぼえて花のしづか也

銅の葉鐘新し花のもと

花曇焦酎匂ふ軒もあり

青空の朝さだまりぬ山ざくら

花のうへちひさき星の流れけり

ゆふぐれの花は其日の姿なり

花にゆき江にゆく鳥や山かづら

花見れば花に眠れる人ごゝろ

吳川

文蘿

素更

竜至

友甫

一透

古蓼

里晴

甫立

世を見れば桜世に経るさくら谷

能登黒島

玻井

人の声なき夕山のさくら哉

、

柳汀

駕に乗人なかりけり花の山

、

加由

ちると見えて物影白し夜の桜

、田鶴浜

八山

花の雨けふもつのでくれにけり

、

李之

桜よりにほひそめたり東山

、芹川

寸草

夜ざくらにさはらぬ雲の脚はやし

加賀徳田

野青

鐘いづこ恨むあしやの夜の花

、高松

自明

薄曇はれて山路のさくら哉
 山陰や花まだらなる夜明雲
 花山や二夜あかしの流れ星
 しのゝめや一重に見ゆる初桜
 月の出て仲よくなるや初ざくら
 朧ぞと思へば花に名残哉
 筆とめて夜の情も花のもと
 焚撫の跡あたゝかに朝の花
 北空もつか／＼と花のさかり哉

本吉少年 帰一
 少年 李溪
 少年 都園
 少年 松輝
 少年 陸海
 少年 亀十
 寺井 亘石
 加賀 御風
 金沢 棹江

桜見に来ればなるほど二月哉
 青雲の見え来る朝のさくら哉
 雨ばれの露と桜のさかりかな
 おほやけに遊び暮るや桜がり
 月の出の嵐にちるか山ざくら
 うつくしき雲とわかれてさくら哉
 月の夜の花に見込の深き哉
 朝山は雫ながらの桜かな
 ひとり咲谷間の花の盛哉

、 全
 、 白二
 、 可方
 、 車方
 、 午山
 、 九江
 、 草均
 、 六明
 、 梅景

蝶鳥のものたらざりし山桜

月落て花に明たつ山路哉

しはひたる夜は明にけり山桜

夜のいろ桜に消て明にけり

花に月うき世の外の寢覚哉

一もとにあつまる影やはつ桜

道の花見る気になれば散日哉

ひと度はこけても花の流かな

花の山こゝろしづめて見たりけり

、

後橋

、

洞水

、

他石

、

甘谷

、

越夫

、

枝川

、

麦齋

、

涼対

、

百風

折ちらすのちや桜に雨の音
伏芝の塵うち出して花の雲
野桜やかけ樋つゞきの薄曇
曇るべき空とはなりし花の山
川筋をゆけば桜のこぼれけり
約束の人待得たり夜の花
鳥の鳴塵たつ庭のさくら哉
人しらぬ曙ならむ薄桜
人往て我と糸遊の桜哉

、 松任 雪雄
、 林湖
、 済河
、 東郊
、 可碧
、 塘芝
、 雨竹
、 一仙
、 可来

花の上去らぬ鳥の雫かな
 山深し花薄色の日なりけり
 交咲や花に雅木の低みたり
 笙ふくや花見戻りのまち揃ひ
 さつと吹嵐もよしや月の花
 人去ていよ／＼白し夜の花
 ものに気をつく年花の殊勝なる
 こゝろあるかけふも田鶴鳴花の頃
 三よしのは雲井のうちか花車

、 越中水橋 甫水
 、 上市 几青
 、 滑川 梁明
 、 百爾
 、 子蘭
 、 君芸
 、 眼日山僧 桃溪
 、 小林 沙麦

戸明れば山はあけぼのさくらかな

魚のちる渚のながめや花いかだ

夕ぐれや花より出る人の声

花盛どの家もみな明はなし

我庵はさくらの人の余るかな

帰るさの友となしけり花の枝

盛なる花より明て鳴雀

初花のかぞゆるほどに嵐哉

桜哉神仏へもよき次手

、 広野 雅亭

、 黒崎 可積

、 魚津 太翼

、 魯山

、 文景

、 桃屋

、 芸肇

、 周台

越后荒井如蘭

朝夕のさくらものうき盛かな

翌来むと思ふうへより散桜

雨に来てうれしや花の東山

雪にかたぶきし庇はいまだ

そのまゝながら

花の香も吹こすのみか月の風

日はくれて月まだ出ず山ざくら

山ざくら咲日は風のみでたけれ

ちる花をいたみ／＼て戸ざしけり

手枕に桜がもとの眠気かな

、旭浪

、尔芳

、新潟 喜年

、高田 几丈

、柏崎 其貞

、長岡 宇瓊

、太史

、来明

はつ桜夜雨に枝の雫せり

白雲の行かさなるや花の山

花を詠め水をながむる日ぐれ哉

佐渡

文雄

湛水

全

八隅しゝ芳野となりぬ花の雲

夜桜や我に蛙は何とやら

近よればみないとこめく花見哉

散ものにしてあはれ也桜花

初花のそこらを二日月夜哉

美濃

千阿坊

奥仙台

乙調

全

、雄渕

、津軽 里川

花さくやもとの色あるうつせ貝

上毛桐生

蘭皋

雲は谷にうち片付て朝桜

全

夢にかたる髑髏を花の主哉

武蔵青梅

嘯谷

散花を扇にたゝむゆふべ哉

、沢井村

亀使

ちり残る花又松の間より

江戸古学庵

祇徳

咲花の花の中なる東山

甲斐府中

方居

葉桜やすこし曇りぬ下休み

信濃下和田

蓬尺

しづかさや蝶のはさまる花の薬

、

寛之

酒売が折てもどるやはつ桜

、

清花

山ざくら人に古風はなかりけり
我に友あり花に來りて鳥が鳴
よき癖のつきし日和や花曇

、伊奈 梅布留
、諏訪 菩雪
在信濃 世徳

つくろはぬ深山桜を初ざくら
我いほに春のありつく桜哉
くれ遅き花に泣人けしからず

肥前長崎 洵美
、 吾友
肥后熊本 潭月

ある法師の言葉を甘ず

はづかしき人にもまじる花見哉
おなじ世に花は年／＼咲めぐる

吉野川桜渡 可翠
、柳渡 河洲

滝川の桜よび出す月夜哉

洛 秋水

花の雲かならず雨をさそひけり

、 甫尺

花の瀧美人の顔をそゝがばや

、 斗雪

花のため竹の下道作りけり

、 葦笠

百性の手拭白し花のもと

、 八仙

水雲の輪に入鳥や花最中

、 梅笛

居りしめて人を待也山ざくら

夜桜や所の人の高野

花衣つかねて嵐守夜かな

花曇はるかに鶴を聞日哉

見て通る花にひとつの願ひかな

雨いとふ衣にひつつくさくら哉

あらしとはいへど中／＼桜かな

銀燭のうつりも深し花の雲

衣きせぬ里も過けり桜狩

、 、 、 、 、 、 、 、

桂郎

一笑

玉藻

楓師

双南

布雪

徳野

有國

其川

桜がりさくらにうつる香ぞ深き

峰におく雲やしりへて花曇

花に来て花をわするゝ山辺哉

花を出て松ありて又花の中

花盛能過る日和大事也

やごとなき身にもかゝりぬ花の雪

けふはけふの花ちる暮の嵐哉

常盤木の下より暮てちる桜

清水や神と仏の初桜

、
砂香

、
米子

、
其白

、
漢水

、
あたふ

、
林鳩

、
駟丹

、
百磨

、
在貫

花供養西行庵の隣かな

人といふ人にあまらぬ桜哉

月花と夜はわかれてぞ明にける

箱根山にて雨ふりければ

わたくしにぬれても見たり糸桜

遅桜松やもみぢのふとり哉

楽／＼と見ゆる桜の山家かな

日の影や庭のさくらに餅の黴

いつの年も盛はしらぬ桜かな

、

、

、

、

、

、

、

、

其成

後楽

百池

芦涯

古塘

乙道

田禾

蒼虬

遅来

くれ／＼て桜に残るゆふべ哉
ちる花も有やわかばの東山

大坂

魯隱

、
長齋

名月や昼ほどものを売ありく
ゆく水のよどむところを月見哉
隣から此樹うら見む月の会
名月や啼やむ鳥の行ゑ見む
名月や枕の沙汰は明てより
名月や人なつかしき池の面
親に似た人の行けり盆の月
草も木もみなぬれ色やけふの月

安芸小方
可友
、広島
玉桐
出雲松江
繫珠庵
筑前木屋瀬
友雄
筑後志津里
仙李
、
淇竹
、
其成
、
柳雨

名月や何も流れず角田川

大かたは泪目にもつ月見かな

世の中を願ひ過して夜寒哉

夕風のとまるところか花薄

名月やこゝろすませば鳥の鳴

月代に牧の野髪のあらし哉

月に遊ぶ今宵を雲のかゝりけり

二日月曙に似て暮にけり

さればこそ侍甲斐ありてけふの月

、

、

、

、

日向美々津

肥前島原

、三宝

、伊福

、多比良

双鳥

文角

亀算

羨乎

吟龍

豊草

文士

万戸

几睡

(月一ウ・二〇ウ)

秋来見月多帰思自起開箆放白鷗と

いへる陶淵明が(ママ) 竟など思ひつゞけていと哀なる夜

秋の月つら／＼更て親恋し 万夫

岩に咲花や月夜の浪がしら 楽只

舟かりて月を柴山におくりけり 土黒 吐竜

露宿る草葉に重し朝の月 利貞

雲岫に収りて月の照夜哉 蘭谷

世静に月待空のけぶりかな 桃仙

月のうへありくも月の眺かな 全

名月や見事ことしの藁庇 諫早 文塘

灯ともせば木賊に見えずきり／＼す
かくれ家の障子あたらし後の月
誰骨か月の野末に晒にけり
月を見る我に寝時はなかりけり
月照や清き麓のはなれ家
更るほど月澄にけり杉の上
声立ず居ても淋しや雨の萩
萩咲や庭にわづかの月うつる
雨ちかき夜や雁金の落る音

、
、長崎
、
肥後熊本
、菊池
、
豊後日田
周防白松
梅路
洵美
季明
箕溪
朝四
碧泉
仁里
春郷
全

(月二ウ・二二ウ)

虫さま／＼小島に聞や舟のやみ

月今宵舟には笹もなかりけり

鹿鳴や柚が枝折戸月のさす

秋もまだ蚊柱残る暑さかな

うかれけり月の鳥の夜もすがら

夕ぐれや鳴さへうせて岸の鐘

そぼ雨に野菊みだるゝ小道かな

野になれて鳴子のもとの鶉哉

はゞかりもなき夜歩行や虫の声

、

、

、

、

、

、

、

、

、

女

和道

猗竹

徐来

文完

薩

露丘

蘭那

梅暁

李流

(月三才・二三才)

小夜更て茶がまのたぎる夜寒哉

、亡人

羽仙

露おもき草のしをりや鹿の声

、名多島

報世

片手艫の舟のいくばくぞ月今宵

阿波西分

羽角

月影にかゝえてもどる菌かな

、

羽大

早うちつゞきければ

世の中は月より雨を待秋ぞ

讃岐

芝峰

蒲団着て寝た山よりぞ後の月

近江八幡

芳志

盆の月あまりにのびし草のたけ

、

栢翠

石川や流もきよき月の船

、舟橋

可卜

(月三ウ・二二ウ)

待宵や曇れど通ふ月の脚
竹の月竹吹ぬれば雲のゆく
名月や玉の中にも居るこゝろ
名月や底もあかるき伊勢の海
後の月鳥の霜ふむ夜明かな
ひとつかみ野萩折来る月見哉
鳴鹿に三笠の山の月くらし
月出て楓もみゆる山路かな
雨の月たゞ木犀の匂ひけり

伊勢寺方
、相可
、津
、安部
、少年
、前田
里朝
有栗
理玉
イ松
睡雨
古同
維石
蘭兮
居平

ありあはすものとはなし月の客

残菊や夜明／＼の月の宿

こしかたは皆月夜也秋のくれ

松二木いざよふ月の伏家哉

川こえて鳴たつ里の日ぐれかな

旅人の身にありがたき月夜哉

笠のうへゆく浜荻の声

ねぢれたる軒も直さず秋暮て

、
朴所

、松坂
権己

、雲出
青川

、大塚
烏翠

杜屋

田禾

烏翠

杜屋

(月四ウ・二三ウ)

おもひ／＼に湯漬けしてくふ
大年もしづかに雪の積る也

焚あまるほど柴をもちこむ

又と来ぬ姫路の伯父をとめ置て

明石の蛸のとれる西風

曙のうつすりかゝる松のうへ

門までゆけば楽のはじまり

焼めしを面々の腰につらぐりて

岩の鼻から筏すべらす

屋 翠 禾 屋 翠 禾 屋 翠 禾

(月五才・二四才)

卯の花がさけば忘るゝおこり病

何か袂にかくす月影

ひいやりと塗戸に背を打もたせ

露に餌ひらふ鳥を見てゐる

川こえて又一村は花もなし

霞のおくに螺貝をふく

どこもかも護摩の匂ひに冴返り

目をすりながら乗物を出る

白紙につゝみし草も皆しほれ

屋 翠 禾 屋 翠 禾 屋 翠 禾

(月五ウ・二四ウ)

見つけられたる小平太が恋

春日野の鹿の子を庭につれて来て

雨にふられた竿の染紬

味噌豆の下はどむどゝもえる也

方丈ばかり通すかみの間

ひそ／＼と具足かゝえて物語

峰の松風沖の白波

わけもなく月の夜烏立さわぎ

敦賀祭の米くさき酒

屋 翠 禾 屋 翠 禾 屋 翠 禾

(月六才・二五才)

やゝ寒くけむぼう染のはやり出し

あぶら嫌ひの鬢のをかしき

闕シキひとつこゆれば春も二三月

花にきこゆる里の餅搗

ほつとする醍醐の坂の堇草

ひとつ／＼に鳥帰るそら

猿の啼むかふにおがむ不二の月

三日月に行あたりけり草の門

信濃坂木

、諏訪

朝左

善雪

翠 禾

屋

禾

翠

屋

(月六ウ・二五ウ)

名月やむしろたゝめばけふの空

我宿のむぐらふみしく月夜哉

汐みちて白浜もどる月の人

月今宵浪しづかなりあはび浦

薦槌の唄にもあはす秋の雨

とても秋とく来て鳴よきり／＼す

けしからず虫飛ぶ月のゆふべ哉

ふうはりと月こそ見ゆれ花薄

月のさす宵はおかしや壁の穴

、林

風子

、里風

上毛沼田 山和

相模磯部 悦応

奥津軽 文石

全

、二本松 似水

莫端

六一

(月七才・二六才)

名月やちよこ／＼出たる晚田守

しのゝめの色もおぼえずけふの月

秋のゆふべ風も紅くゝる音

山寺の鐘にさかりや蕎麦の花

礮枕月になる夜の荻の声

月もるや軒にしてうつ小夜砧

名月や沖行白帆釣小舟

なほゆかし今宵千里の月の友

、 乙調

、 安達 左一

、 伊達 沢雉

、 為舟

但馬舟谷 五含

、 月鳥

、 夏梅 桂月

、 沙月

稲の花かをるや月のゆふべより
影ひろく須磨は沈みて海の月
雨の月今宵ぞ山の壁ごゝろ
浅水や千々にゆりこむ月の色
名月はとがれる石もなかりけり
蝶や幾夜の月に壁薄き
名月や野川の見えて雁下りる
名月や川をこゆるも旅ごゝろ
名月に人音さびしみだれ鶏

、
、
丹波水上
加賀金沢
越後荒井
能登輪島
、宇出津
、黒島

湖月
烏雪
魯縞
兔文
如蘭
全
北山
碩茂
加由

人／＼におくれて月の嵐哉
子坊主の眠りながらに月見かな
宿帳につかぬ人ありけふの月
夜すがらや月見に歩行月の中
名月は秋のかたぶくはじめ哉
ちら／＼と草も花咲けふの月
鹿啼や大きうなりし山の月
白露をうちしく草の月夜哉
後の月窓に横たふ黍の影

、三階 五橋
、鵜川 之楓
、芹川 寸草
洛 芦涯
玉藻
岱李
、 馬蓼
、 百磨
、 和良

名月や雲を置たるあとの山

、
蒼虬

花供養月の会といふは、今の芭蕉
堂蒼虬ぬしや、田禾らがためのをしへ
のおやなるさきのはせを堂蘭更うし
が、月花の道のときはかきはにさきひ
ろごり、てりかゞやきて、正木のかづら
ながく世に伝へむことをおもひて、年
／＼につとめられしいさをになむ侍

(月九才・二八才)

るを、今の蒼虬ぬし、はたそのこゝろ
ざしをつぎて、春秋にそのわざおこ
たらねば、なほこの道の人たち、こゝろ
をあはせて、月花につかへまつろひた
まはゞ、うべなきほきごとにや侍らむ。
されば、かく桜木にもものして花におくれ
たるを、月にそえ月におくれたるを花に
くはへて、いよゝます／＼、月花のみたま
をいのらむといふことを田禾ら申す。

(月九ウ・二八ウ)

書林

京御幸町錦小路上ル

勝田喜右衛門

(裏表紙見返し)

(裏表紙)